

温泉を活用した地域振興活動の実践 —中宮温泉の湯治場の活用による地域振興活動の研究—

学生団体名：地域交流研究会（金城大学短期大学部ビジネス実務学科）

参加学生：瀧口綾香 田島由佳 能登麻美 藤倉美佑貴 尾村なぎさ 酒井綾香
林理可 伴和澄

1. 地域活動の概要

中宮温泉及び周辺地域をフィールドとして、周辺の観光資源、温泉施設等を活用した体験型観光活動についての提案を行うことを目的とした。とくに、地元大学生の視点から、①若者が気軽に遊びに行ける場所としての白山ろく、と、②首都圏に売れる素材としての白山ろく、という2つのテーマを設定し、地元のオピニオンリーダーへの聞き取り調査や現地でのフィールドワーク、金城短大生への聞き取り、質問紙調査などを行った。

2. 地域活動の具体的な内容

■第1回活動 11月3日（火・祝） 学生4名参加

白山ろくのフィールドワークを行う。前日にスーパー林道が積雪のため通行止めになり、尾口地区（新中宮温泉地区、中宮温泉の旅館、みやげ物品店等）、白峰地区（雪だるまカフェ、総湯等）、鳥越地区（道の駅）、吉野谷（キャンプ場、綿が滝等）を訪れ、地元の方の話を聞きながら、若者でも満足できるスポットを掘り起こす作業を行った。

とくに、温泉の選択行動とおみやげ物に注目をし、現品を持ち帰り、後日開催した、新商品の開発に使用した。



■第2回活動 11月5日（木） 学生8名参加

第1回活動で持ち帰った白山ろくの特産物を使用し、若者が注目しそうな製品開発のアイデアを出し合う。予想に反し、白山にしん寿司や白山なんば味噌などの味も白米のお供として好評であった。

特産の巨大なめこや堅豆腐を使用しての製品を検討した。フィールドワークをする前から、福井県の三国バーガーを参考に、折からの高カロリーハンバーガーブームに反旗を返

し、白山オリジナルヘルシーバーガー「堅豆腐バーガー」を試作してみる。この時点では、堅豆腐ステーキバーガーを想定し試食した。



■ 第3回活動 12月20日（日） 学生2名参加

スキー場オープン2日目に市場調査と施設調査を行った。白山ろくの各スキー場に関しては、ここ数年、年内オープンは出来ない状態であったが、今シーズンは白山一里野温泉スキー場が12月19日に無事オープンした。

20日に行った調査では、各年代にわたり、多くのスキーヤー、スノーボーダーが早朝から集まっていたことがわかった。白山市地域振興公社が管理している温泉施設「天領」では、日中は温泉客、スキー客の姿が観察できたが、夕方になるとほとんど客はいなかった。施設を実際使用すると、そのすばらしさは口では説明できないほどであった。情報さえ「知っていれば」また来たい温泉施設であると確信した。



■ 第4回活動 1月15日（金）～16日（土） 学生3名参加

新中宮温泉でペンション中宮を運営している安本知子さんへ、白山ろくでの現在の取り組みや、今後の展望、若者の遊び場になるためのヒントなどを聞き取りに行った。

今年はとくに雪が多く、近年にない景色を作り出しているとの説明を受けた。これまでの研究からは、雪のない地方、日本で言えば、関東圏、関西圏に観光客、外国で言えば台湾や東南アジアの観光客には「雪」というのが観光モチベーションを高める重要な要素であることが分かっている。しかし、北陸で生まれ育った金城の学生達が積極的に雪を見る

ことを望むかは、検討の余地がある。自分自身、雪は子供のころから身近であり、小さいころならいざ知らず、大学生にまでなると、面倒くさいものでこそあれ、決して喜ばしいものにはなりづらい。

白山ろくの温泉は平日であれば 18 時、19 時ころには、休日でも 21 時には営業が終わる。宿泊客なら旅館、ホテルの温泉は利用できるが、日帰り客には物足りなさを感じる。ただ、お話をうかがう限り、平生の客の少なさや生活リズムの違いもわかり、理解は出来るようになった。



3. 地域活動の評価

地元の大学に通いながら、もしくは地元出身でありながら、ほとんど情報も知らないまま、関心を持たないまま短大生になっていたのが、今回の試みは新しいことを知る良いきっかけとなった。しかも、積極的に遊びに行きたい場所、食べたい食事、自ら参加したいイベントなどが数多く行われていることも知ることが出来た。

研究会としては 2 年継続して活動しているが、この 2 年間で知ることが出来たものはまだまだ少ない。

もっと幅広い世代の人に、もっと多くの方に、話を聞き、白山ろくの現状でどんな課題があるのか、地域社会が今後どうなっていくのか、どういう方向を目指して行きたいのかを聞けるようになればいいと感じた。

4. 今後、この地域活動を継続、活発にしていくために必要なもの、及び課題

今回の活動からは、地元の声を集約するまでには至らなかった。

現状では若者に特化した施設、名物、コンテンツがあるわけではない。今回の活動を

通しては、とくに若者に特化したものを用意する必要がないのかもおもったが、話し合いの過程の中で出てきた意見をいくつか紹介すると、

○ハード

スキー場を使つてのソリ大会
24時間営業のスキー場
町全体をイルミネーション

○ソフト

県外客向けの季節ごとの旅行プラン
霊峰白山に肖った“占い”
温泉手形・温泉パスポートの活用

○フード

白山百膳のアピール
若者向け堅豆腐フルコースの開発
白山ハンバーガー

○その他

何もないことを売りにする (ex;星のや京都)
手取川下り (手取峡谷でのラフティング)
黄金伝説的なサヴァイヴァル体験

どれも、どこかで実践され、成功しているもの、失敗しているものもあるかもしれない。若者の声が地域に届きづらい現状では、上記以外にも学生同士の議論で出てくる、多くの種荒唐無稽な話の中から地域づくりのヒントとなるものが地域にフィードバックされれば良いと思う。

1つ、われわれの真剣な話の中で、これからの末永く残っていくウリは「リアル」、「本物」にこだわらなければだめだ、ということである。多くの成功体験、失敗体験を元に、白山に来なければ出来ないこと、白山にしかないものを、地元の人たちと一緒にあって見つけ出して行きたい。



5. その他 (学生や地域の方の感想等)

学生への聞き取り調査や、調査票調査を実施した結果、予想通り温泉好きな傾向があることが確認された。われわれが調査した結果、白山ろくには、伝統的なお風呂から、秘湯、秘境の温泉までがあることがわかった。このことは絶対若者世代には受けると思うし、お客様を呼べる素材になるはずである。

しかし現在そうっていないのは、われわれも含めてきわめて情報に疎いということである。今回、実際にフィールドを歩いてみて、楽しいもの、楽しい話、美味しいもの、などなどたくさんの資源がありながらも、地元の自分達が知らなさ過ぎることが分かった。

如何に情報を発信するか、如何に情報に触れるか、送り手、受け手の両方が、情報の取り扱いについて検討していく必要がある。

これを機会にもっともっと若者達が地域に入り、もっともっと地域の人々と話す「場」が増えていけばいいと思う。